

蓬 左

HÔSA



銅人腧穴鍼灸図經
裏打紙文書

伊藤家と東本願寺造営

魚津社寺工務店 取締役営業部長 小山興誓

尾張の名工伊藤満作(守房、一八五九—一九一四)の家に伝来した資料群である『伊藤満作家資料』。同資料は満作の孫にあたる名城大学の伊藤三千雄名誉教授(一九三四—二〇一一)から、平成二十三年(二〇一一)に名古屋市蓬左文庫へ寄贈された。

伊藤家が全国的な名工として活躍するのは、東本願寺造営参加および同寺肝煎大工柴田家との出会いが契機となっており、『伊藤満作家資料』にも関連した図面や文書類が含まれている。本号では、それらの貴重な資料の一部を紹介しながら、東本願寺造営、工匠ならびに伊藤家との関係を見ていく。最後に、柴田・伊藤両家に関わった造営略年表および略系図を掲載する。

まず、東本願寺および造営に関する概要から見ていこう。

東本願寺(京都市下京区)は真宗大谷派の本山で、その歴史は慶長七年(一六〇二)に徳川家康より寺地を寄進され、東西本願寺が分派したところから始まる。

東本願寺の広大な伽藍には、宗祖親鸞聖人(一一七三—一二六二)の御真影を安置する御影堂

と、本尊である阿弥陀如来像を安置する阿弥陀堂の両堂を中核として、数々の殿舎群が配置されている。

東本願寺は、西本願寺(京都市下京区)とは異なり、江戸時代から明治時代にかけて、慶長度、明暦・寛文・元文度、寛政度、文政度、安政度、明治度の計六度にもおよぶ造営を成し遂げてきた。この内、寛政度から明治度は、罹災からの再建であり、現在の主要堂宇は明治度造営のものが中心となっている。

次に、伊藤家と東本願寺および肝煎大工柴田家との関わりを、造営組織と共に紹介したい。

東本願寺が初めて灰燼に帰した天明八年(一七八八)の大火からの再建は、寛政度造営と称される。しかし、それからわずか三十五年後の文政六年(一八二三)十一月十五日に山内失火により、寛政度伽藍は焼失してしまう。このときの復興は文政度造営と呼ばれる。偶然にも、本山が火災に見舞われたのは、真宗大谷派名古屋別院本堂の遷仏法要当日であった(図1)。

この名古屋別院本堂再建に先がけて、解体保存されていた元禄十五年(一七〇二)建立の旧本堂が、本山造営期間中に宗祖親鸞聖人像を安置する仮御影堂として、移築されることになる。

元禄度旧堂は、伊藤家三代の萩平左衛門(一六四八—一七三三)が棟梁を務めているように、同別院は代々伊藤家が出入りをしていた。

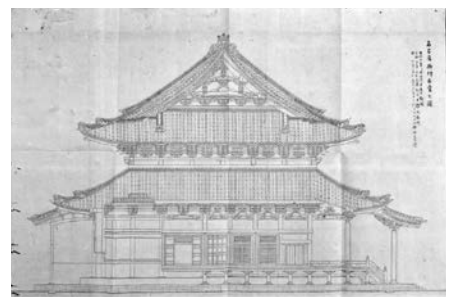


図1「名古屋御坊本堂之図」

文化2年(1805) 10月15日新始
文政5年(1822) 11月1日上棟式執行
同6年11月15日16日17日入仏供養会

そこで、文政度本堂棟梁の伊藤平左衛門七代信濃守之(義守、一七八一—一八五二)は、息子の八代守富(一八一四または一八一八—七七七)と共に、元禄度旧堂を東本願寺へ移築することによって、本山造営に参加する機会を得た。

しかし、この時点での伊藤家はあくまで本山再建のために、諸国の門徒が作料などを負担する形で各地から派遣された多数の寄進方大工の一人であり、棟札銘にも名前はない。棟札に記載がある工匠は、最上位の棟梁と肝煎になる。

前者は東本願寺家臣として代々継職する笠井家を筆頭として、他に田辺・高木の二家を加えた「三棟梁」で構成される。後者の肝煎は、棟梁方が造営の度ごとに複数名を選任し、その下で作図をはじめとした工事の実務を担当しながら、配下の大工への指示・管理を行っていた。

棟札に記される四、五名の肝煎は、上位の惣肝煎にあたり、特に筆頭を惣肝煎頭と呼ぶ。

既述のとおり、東本願寺では寛政度、文政度、安政度、明治度の計四回にもおよぶ焼失からの再建を成し遂げてきた。この内、寛政度―安政度および元文三年（一七三八）上棟の御影堂門（大門）の各造営で、常に惣肝煎に名を連ねてきたのが、名門柴田家である。

ただし、柴田家は決して東本願寺専属の大工というわけではない。その腕を買われ、西本願寺阿弥陀堂、妙心寺仏殿（京都市右京区）、高野山金剛峯寺金堂（和歌山県伊都郡）といった各宗派の本山造営にも参加している。

この中で、西本願寺阿弥陀堂の宝暦九年（一七五九）の棟札銘における同寺棟梁水口家の下に三名の大工がおり、その筆頭として、柴田理右衛門政種（？―一七八二）の名前が記されている。政種はその後、明和元年（一七六四）に東本願寺棟梁笠井家の名跡を継いで、笠井若狭政種（三河正種）となった。

その子、柴田新八郎貞英（一七四一―？）も、西本願寺阿弥陀堂造営に参加した後、宝暦十三年（一七六三）から井波別院瑞泉寺（富山県南砺市）再建に関わりながら、京都で禁裏御所御用も務めている。その後の東本願寺寛政度造営では、惣肝煎頭として活躍した。

続く文政度造営では（図2）、柴田新八郎（木子）棟躬（一八〇一―一四九）が襲名している。棟躬は禁裏修理職大工木子家の養子に入った名匠で、日向掾を叙任する。

当時の伊藤家八代守富とその甥で、守富の養子となって九代目を襲名する平作（守道、一八二九―一九一三）も、柴田家の配下として、東本願寺文政度御影堂門や高野山金剛峯寺金堂の再建に従事していた。

伊藤家が師事した名工柴田新八郎の系譜にあり、東本願寺安政度造営で惣肝煎頭を務めるのが、柴田伊勢大掾貞次（二七九〇―一八六三）である。貞次は文政度造営時点では柴田奎之助を名乗っていた。この柴田貞次の娘が、安政度造営の

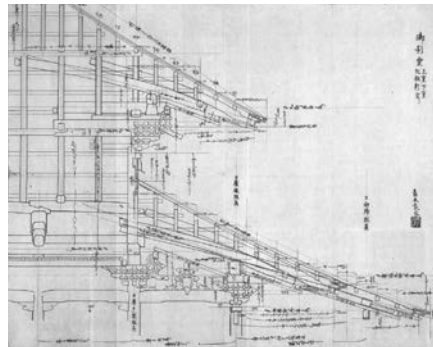


図2「御影堂上重下重化粧軒定り」
青木良容（新助良容）
〔文政度御影堂・阿弥陀堂惣肝煎頭〕

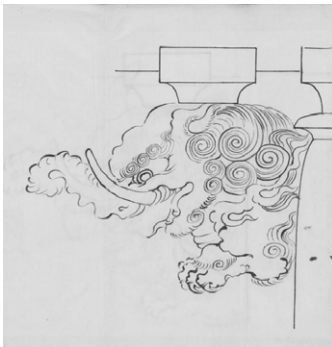


図3「高野山彫物下絵」部分
嘉永3年（1850）5月
柴田奎之助（伊勢大掾貞次）
〔金剛峯寺万延度金堂彫物師筆頭〕

惣肝煎に台頭する八代守富に嫁ぐ。つまり、伊藤家は東本願寺棟梁―肝煎大工の系譜を引く名門柴田家と姻戚関係になったのである。

さらに貞次の孫娘は、守富の養嗣子満作守房の妻であり、これが『伊藤満作家資料』に柴田家の関係文書が含まれる由縁にもなっている（図3）。

その後、明治維新を経て家臣制度が解体され、笠井家などの東本願寺棟梁も解任となった。

元治元年（一八六四）禁門の変で焼失した東本願寺の再建は明治度造営と呼ばれる。明治十三年（一八八〇）に、伽藍の中樞をなす御影堂・阿弥陀堂の両堂棟梁として任命されたのが、伊藤平左衛門九代守道と、柴田新八郎棟躬の養子木子棟斎（一八二七―一九三）であった。

後者は安政度造営の惣肝煎として、柴田新八郎棟斎を名乗っていたように、いずれも柴田家の系譜にあり、棟躬のもとで共に十代から仕事をしてきた仲である。

この明治度造営には、守道の長男十代守明（一八七〇―一九二〇）や満作も参加しており、伊藤一門が全国的な名工として、大きく飛躍する転機となったのである。

謝辞 本研究はJSPS科学研究費助成事業（科研費）基礎研究C（課題番号：22K04526、代表：米澤貴紀）の助成を受けたものである。

※ 図1―3はすべて蓬左文庫蔵。

表1 造営略年表

- ・本表は柴田家（青字表記）および伊藤家が関与した造営の略年表で、大工の色分けは「図4 略系図」と符合している。
- ・笠井家を筆頭とする東本願寺三棟梁制の初例となる大谷祖廟（東大谷）造営から明治度造営までを掲載している。
- ・東本願寺および廟所・別院造営だけでなく、柴田家が関与した西本願寺、妙心寺、高野山金剛峯寺も掲載している。
- ・現存するものは、太ゴシック体で表示した。
>

No.	造営	和暦	西暦	出来事	棟梁 ※（ ）内は筆者加筆	肝煎など ※（ ）内は筆者加筆	出典
①	大谷祖廟 (東大谷) (東山区)	元禄 15 年	1702	本堂 上梁 惣門 (北門) 造建	笠井若狭可廣 (2代) 宮川河内清教 田辺備後森安 (2代)	肝煎など	A
②	東本願寺 元文度 (下京区)	元文 2 年 元文 3 年	1737 1738	大門 柱建 上棟	笠井若狭藤原正傳 (3代) 田辺備後源芳信 (3代) 高木淡路源喜始	谷口五兵衛 木子市右衛門 富永理兵衛 柴田理右衛門 (政種 先代)	B, C
③	西本願寺 (下京区)	宝暦 9 年	1759	阿弥陀堂 修造	水口若狭守藤原朝臣宗貞 水口伊豆守藤原朝臣宗為	大工 柴田理右衛門政種 雑賀長右衛門貞好 藤井三左衛門保住	D
④	井波別院 瑞泉寺 (富山県 南砺市)	安永 3 年	1774	本堂 上棟	笠井若狭 (柴田理右衛門) 政種 (5代三河正種)	棟梁代 柴田清右衛門 (貞國 先代)、大工下棟梁 与八郎 大工世話役 角右衛門、利兵衛、善右衛門、久四郎	E
		安永 4 年	1775	御坊鋪地絵図	図師 笠井若狭 (5代正種) 傳 (柴田理右衛門政種)	柴田貞英 (忠右衛門から新八郎貞英に改名か) 書之	F
⑤	山科別院 長福寺 (山科区)	天明 4 年	1784	本堂 再建	笠井若狭正安 (6代) 田辺備後長重 (6代) 高木淡路久重	柴田忠右衛門貞照 福田清兵衛清近	G
⑥	東本願寺 寛政度	寛政 9 年	1797	御影堂 上棟	笠井若狭正安 (6代) 田辺備後長重 (6代) 高木小太郎久治	柴田新八郎貞英 柴田忠右衛門貞照 西木清右衛門久重 井上三十郎秀信	C, H, I
		寛政 10 年	1798	阿弥陀堂 上棟		橋本新兵衛政清 (大門のみ)	
		寛政 12 年	1800	大門 上棟		柴田清之佑貞重、柴田奎之輔國光	
⑦	本龍寺 (金沢市)	寛政 10 年	1798	本堂 上棟	柴田清右衛門藤原貞國	柴田清之佑貞重、柴田奎之輔國光	棟札銘
⑧	井波別院 瑞泉寺	文化 6 年	1809	山門 上棟	柴田新八郎貞英	松井角平恒徳 (東本願寺造営⑥、⑪にこ参加) 柴田清右衛門貞國 (")	I, J
⑨	妙心寺 (右京区)	文化 10 年	1813	仏殿 新始	神森若狭 (勝信)	番匠 柴田忠右衛門 (貞照) 木子作太夫 (近江大掾勝久)	K
		文政 10 年	1827	上棟	神森若狭藤原勝信 番匠 木子近江大掾藤原勝久 神森太市郎藤原勝照	沙汰人 柴田八郎兵衛 (平八郎貞種) 柴田新八郎 (棟躬) 青井利兵衛、片岡庄八郎	
⑩	名古屋別院	文政 5 年	1822	本堂 上棟	伊藤信濃守之 (7代義守)	脇棟梁 伊藤平八郎義房 (6代)、伊藤惣右衛門道好	L
⑪	東本願寺 文政度	天保 4 年	1833	御影堂 上棟	笠井三河正直 (7代) 田辺備後義重 (8代) 高木淡路有義 笠井若狭正典 (8代)	青木新助良容 山中平左衛門宗重 柴田平八郎貞種 中江定治郎義忠 柴田新八郎棟躬	H, I
		天保 6 年	1835	阿弥陀堂 上棟		青木新助良容 中江定治郎義忠 柴田新八郎棟躬	H
		弘化 4 年	1847	大門 上棟	笠井若狭正佐 (9代) 田辺備後義重 (8代)	柴田新八郎棟躬 中江貞次郎義忠	M
⑫	高野山 金剛峯寺 (和歌山県 伊都郡)	安政 2 年 万延 元年	1855 1860	金堂 落成 再建	正大工 狭間河内大掾 権大工 小佐田出羽大掾 小佐田勘之丞	總肝煎 柴田日向大掾 (新八郎棟躬)、森肥後大掾 藤田長五郎 (直光)、藤田上總大掾 副肝煎 伊藤平左衛門 (8代守富)、伊藤總右衛門 (道好) 古橋太郎兵衛、森丈助、鶴飼長兵衛 (他2名) 扇物師 柴田伊勢大掾 (貞次)、九山新四郎 柴田文助 (貞清か)、中川利兵衛	N
⑬	東本願寺 安政度	万延 元年	1860	御影堂 上棟	田辺河内道重 (9代) 笠井若狭正重 (11代正言) 高木讃岐道保	柴田伊勢大掾貞次 伊藤平左衛門守富 (8代) 柴田新八郎棟斎 橋本治助一富 古橋太郎兵衛 (大門のみ)	H, I
				天門 上棟		惣門 (表唐門) 上棟	
⑭	大谷祖廟	文久 2 年	1862	阿弥陀堂 上棟 総門 (表唐門) 上棟		惣門 堀土吉之助長吉 田中熊七長一 世話方 柴田安兵衛重次	A
⑮	東本願寺			東照大権現宮 靈儀殿 上棟		松井清三良義智 伊藤平左衛門守富 (8代)	
⑯	東本願寺 明治度	明治 22 年	1889	御影堂 上棟	伊藤平左衛門守道 (9代)	補役 伊藤吉太郎 (10代守明)、伊藤春房 (満作守房か)	H, I
		明治 25 年	1892	阿弥陀堂 上棟	木子 (柴田新八郎) 棟斎	八田美之輔、田村理七、市田重郎兵衛ら肝煎計 22 名	
		明治 43 年	1910	大門 上棟	市田重郎兵衛、市田辰藏	松任銀次郎、宮部安四郎、今城寿市ら肝煎計 8 名	

〈参考文献〉

- A 『真宗本廟 (東本願寺) 飛地境内地建築群総合調査報告書 大谷祖廟・高倉会館・涉成園』(真宗大谷派〈東本願寺〉、2022年)
- B 『御再建見聞私記』(城端別院善徳寺蔵)
- C 『天明八年日記 御再建日記 真宗本廟 (東本願寺) 造営史料叢刊 1』(大谷大学、2014年)
- D 『重要文化財 本願寺本堂 (阿弥陀堂) 修理工事報告書』(京都府教育委員会、1984年)
- E 『佐々木文書』(南砺市蔵) ※浦辻一成氏 (善徳文化護持研究振興会) のご教示による
- F 『越中国砺波郡井波杉谷山瑞泉寺御坊鋪地絵図并近辺所見之図』(井波別院瑞泉寺蔵、1775年)
- G 「山科坊棟札図」真宗大谷派所蔵史料 ※登谷伸宏氏 (京都工芸繊維大学) のご教示による
- H 『明治造営百年 東本願寺 下』(真宗大谷派本廟維持財団、1978年)
- I 『真宗本廟 (東本願寺) 造営史 一本願を受け継ぐ人びと』(真宗大谷派宗務所出版部〈東本願寺出版部〉、2011年)
- J 『井波別院瑞泉寺誌』(真宗大谷派井波別院瑞泉寺、2009年)
- K 『重要文化財 妙心寺仏殿修理工事報告書』(京都府教育委員会、1985年)
- L 『名古屋別院史 史料編・別冊』(真宗大谷派名古屋別院、1990年)
- M 『番匠研究 徹到録 甲』(1903年) (『岩城家文書』滑川市立博物館蔵)
- N 『高野町の歴史的建造物』(高野町教育委員会、2023年)

銅人経拓本のウラの顔 — 蓬左本の構造と「裏打紙文書」の整理

立命館大学経済学部授業担当講師 猪俣 貴幸

北京のお役所でのひんじま

時は文化爛熟^{ぶんじやく}の明代^{みんだい}、万曆^{ばんれき}四十（一六一二）年の北京のお役所で、こんなやり取りがあったらしい。

「おーい、この保存期間満了の箱に入っている書類、週明けまでに処分しとけよ。でないと上司にまたどやされるぞ」

「おう、それなら明日には業者が……」

いつの世も同じ、小役人たちの日常である。紙が貴重品だったこのころ、役所で不要となった書類は、まとめて回収され、再利用されるのが通例であった。明の首都北京でも、保存期間が過ぎた行政書類の束はそのまま回収業者に売り渡され、綴じ^{とじ}ひもを切った紙を開き、ウラの比較的白い面を使いやすいよう整えられた。

こうして役所が処分した書類は、文字の

練習などに再利用されたのち、最後は燃料として燃やされるのが普通であったが、時としてその形を変えて靴などの日用品になったり、美術工製品の装幀^{まうてい}などに用いられることがあったりした。跡形もなく消え去るはずだった公文書が現代まで伝存するのは、そうした偶然が引き起こすある種の奇跡にほかならない。

尾張公遺愛の品、「銅人臉穴鍼灸図経^{どうじんしやくけつせんきうずけい}」（以降「銅人経」）の裏打紙にも、北京の役所で処分された公文書が再利用されていた。四〇〇年の歳月を経て蓬左文庫に伝わる拓本^{たくほん}が高い文化的価値をもつことはいまでもないが、そのウラ面もまた、この世に二つとない貴重な歴史資料なのである。

筆者は、井上充幸氏を中心とするこの研

究グループにおいて、蓬左本「銅人経」のウラ面に貼り込められた明代の公文書（これを「裏打紙文書」と呼ぶ）の復元と翻刻^{ほんてく}、内容の研究を担当しており、令和四（二〇二二）年三月以来、最も多くウラ面を調査する機会を得たひとりでもある。そこで得た知見をふまえて、今回は「銅人経」拓本のウラ面を紹介することとしたい。

法帖ができるまで

ウラ面といわれてもピンとこない方のために、蓬左本の構造を説明しよう。

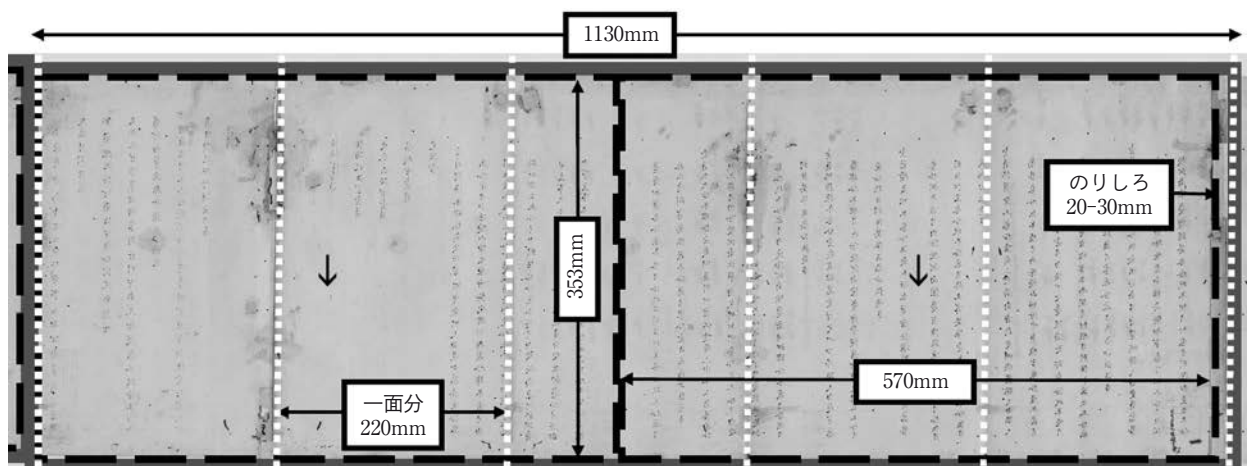
この本は、明代に採られた拓本を折り本に仕立ててある。皇帝の侍医たちが働く太醫院^{たいいけん}の石壁に彫られていた銅人経刻石は、高さも幅も巨大なものであり、そのままでは取り回しにくい。そこでこれを裁断し、帖^{ちょう}（折り本）のかたちに装幀して鑑賞しやすくする。この時の裁断・装幀の仕様によって、蓬左本のように縦長の十冊本になったり、宮内庁書陵部本のように正方形の四冊本になったりするのである。この形式は主に書法（書道）の手本に用いられた形式であることから「法帖^{ほふしやう}」と呼ばれている。法帖の

黒い拓本面が「オモテ」、その背面が「ウラ」である。

ただ、構造的には「ウラ」というよりも「台紙」と呼んだ方がイメージしやすいかもしれない。法帖を作成する際、紙を貼り重ねて少し厚みを持たせた台紙を作り、一定の間隔で折れ目あるいはその印をつけておく。その台紙にカットした拓本を配置するのだが、この時、折れ目に拓本の字がかからないように、行間や字配りを変更するなど調整がおこなわれる。

蓬左本の場合、高さ約三五・三センチ、幅およそ一一三センチの三枚重ねの台紙が用いられ、その台紙には幅二二センチごとに五分分の折れ目が入っている。そして、約三センチののりしろで隣の台紙に接続され、冊子によって差はあるものの、だいたい台紙八〜十四枚（四十面〜七十面）で一冊に装幀されている。（下図参照）

この台紙の少なくともウラ面第一層（法帖最背面）と第二層に、明代の万暦末に保存期間満了をむかえた公文書が再利用されていることが判明した。これらは中国でも発見がないものばかりで、その復元が成功し、研究が進めば、明代史の解像度はより高くなることは疑いない。



【図 裏打紙の現状】 太線：台紙の境界 破線：第一層の切れ目（↓は写字方向） 点線：帖の折れ目

裏打紙文書の整理

これまでの調査と整理によって、第一層には二八二枚の紙が貼られ、そのうち文字が書かれているものが二四二枚、筆者による翻刻作業の結果、文字にして六万字におよぶ文書群であることがわかった。

文書の種類としては、「文職貼黄册」と呼ばれる地方役人の勤怠考課を整理して中央の都察院（監察機関）に報告した書類や、地方長官の引き継ぎ事項を三十一項目に分けて記載した「到任須知」、各地方の役所が管理する穀物や銀の在庫帳簿とみられる「在庫銀・在倉穀文書」などがある。

現在、翻刻したテキストを精読する研究会を定期的に行ないながら、裏打紙として再利用された公文書を、可能な限り元の形に戻せまいかと日々悪戦苦闘している。

令和七（二〇二五）年には、第一層の薄紙を透かしてかすかに見えている第二層へのアプローチを摸索し、さらなる文書の復元と、文化財としての保存修復に向けた取り組みを蓬左文庫や諸研究機関の協力を仰ぎながら進めていく予定である。

続報を期待されたい。

銅人臉穴鍼灸図経裏打紙文書

銅人経のウラに明代の公文書が使われていることは、かねてより知られていたらしい。

『蓬左文庫漢籍分類目録』（一九七五年）や、その元となった資料カードには「萬曆中官牘紙拓本」とあることから、昭和の漢籍調査の段階で、この拓本に明代万暦年間（一五七三—一六二〇）の官文書の紙が再利用されていることがわかっていったようである。

ここでは、近年の調査に基づきつつ、今少し具体的に文書そのものに迫ってみたい。

文書の紀年からみえること

この文書が万暦年間のものであることは一目瞭然の事実である。たとえば、表紙の写真②には「萬曆肆拾年閏拾壹月 日」とあり、その下に知縣（県の長官）と縣丞（次官）・典史（県の文書管理係）の署名欄がついている。③にも「萬曆參拾捌年分」と見え、どの文書にも万暦三十年代後半の日付が見られる。

万暦四十（一六一二）年は日本でいえば「巖流島の決闘」が行なわれた慶長十七年、江戸幕府二代将軍秀忠の治世にあたる。その弟で尾張家初代の義直が名古屋城二の丸に「御文庫（蓬左文庫の前身）」を創設するのが元和三（一六一七）年のこと、その義直がみまかるのが慶安三（一六五〇）年のことであるから、この紙

が装幀用として再利用され、名古屋の義直のもとにやって来た時期は、江戸初期の三〜四十年ほどに限定できる（『蓬左』一〇六号の丸山裕美子氏の説に拠る）。

ハンコ（官印）からわかること

写真②には日付にかかるように「商城縣印」という方印が見える。これはこの報告書が万暦四十年閏十一月に河南懷慶府下の商城県の役所で作成されたことを意味する。文書の本文には具体的地名が出てこなくとも、印記を見ればどの役所かを特定でき、文書伝送のルートも見えてくる。

また、写真①では「巢縣之印」という方印が半分に分かれている。これは、紙を半分に分けて綴じ、綴じて冊子にした報告書のノド（各ページの見開き下部）に官印を割印することで、ページの差し換えや改竄を防ぐものである。本来は正方形に見えていた印面に、もともと綴じ目の中にあつた余白が広げられて間に入るためにこうなるのだ。これも明代の公文書管理の一端が垣間見える部分である。

興味深いことに、この紙を裏打に使った職人は、この朱印をどうやらデザインとして、あえて見えるように配置しているらしい。

このように、裏打紙文書からは、書かれた文字情報のみならず、官印の現状などからも、多くの情報を読み取ることができるのである。

（立命館大学 猪俣貴幸）

蓬左通信

令和四年度（二〇二二）より取り組んできた「伊藤満作家資料」の悉皆調査がひと段落つきましたので、この三月に名城大学米澤准教授が中心となってその成果を『伊藤満作家資料目録』として取りまとめることになりました。近代化前後の大口資料がまとまって残されているのは、とても貴重とのこと。この目録を元手に、より一層研究を進めていこうと考えています。

令和七年（二〇二五）は蓬左文庫が誕生して九十年（昭和四十年（一九三五）／東京目白で開館）を迎える節目の年です。徳川美術館と共に周年記念展を実施する他、近年取り組んできた所蔵資料の研究成果を展覧会等を通じて広く発信していく予定です。長きに渡り、蓬左文庫の活動を支えてくださった方への感謝を込めつつ、初めて来ていただく方に、蓬左文庫っておもしろいなぁと感じていただけるような機会にしたいと思っています。

（蓬左文庫 星子桃子）

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。

■展示室／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料 館外貸し出しはいたしません。

【開架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込みも可。

